

スクラップ氏とブルハウス

幸 府 倂

近頃、ジャーナリストが畜産をとりあげるウエイトは相当なものようである。

例えば、朝日新聞社国土総合開発調査が過去1ヶ年半に亘っての、国内食糧自給の可能性について調査検討した結論を、客年12月18日附の同新聞の第一面に掲載し、畜産開発に重点をおいた食糧政策を提案し更にまた、年末の30日には社説に“畜産物は安く生産できる”と課題して国土総合開発調査会の結論をおしすすめている。大新聞においてかくの如くで、ローカル紙においては、事畜産に関する記事のみられない日はないと思う。

いやな比較かも知れないけれど、自殺と乗物の衝突で生血をみない日のないと同じようである。

畜産課のK氏は、ふと訪れの昨年夏も終りの日、ブルハウス（種牡牛舎）と命名して帰り去った（K氏は蒜山のジャーニー会館が天井のない2階建の故に銀行と名付けた実績を有している、参考までに）此のブルハウスに、たむろす名士の一人は新聞紙の切り抜きに余念がない。

近頃ブルハウスは耐久年限が来たためか、或は建築資金の出し惜みのためか、中心から左右が沈下し室内の建具は方々に空隙を作り、賊風が自由に出入りし衛生管理上面白からぬようである。如何にブルと言われる程の独身男の無精、気促な同居人も寒々とした冬の夜長に退屈し切って、コタツを囲んで猫背になり勝手な仕草に夜な夜なを送っているが、かのスクラップ氏（新聞切抜き氏）は何の意図を持ってか畜産ニュースの切抜きに余念がない。ブルハウスに収容された当時1ヵ月間は新聞を購読したが、その後ある種の事情によってそれを中止した私は、ニュースをくまなく追うことは出来ず、ジャーナリストが畜産ニュースで賑わすすべては彼の日々の夜の行動から得るわけである。

畜産に関するニュースがかくも紙上に発表されるということは、その奥底に国の農業政策が起因していることは勿論である。

ところで一步退って過去を注視してみると、昭和の初年頃にも今日ほどに世上を賑わしたという事実があるのではなからうか。

彼のスクラップ氏の手許にはその資料がないようで残念である。有畜農業という新造語が出来たほどの時期であれば想像に難くない。

おそらくスクラップをのぞけば当時の農民の生の声が或は農村の姿が、まざまざとうかがえるにちがいないと思う。少なくとも冷たい学者の手になる書物によってうかがうよりも、この様な意味あいからして、かのスクラップ氏のスクラップをする意が何処にあるか知るよしもないが、後世の貴重な資料として編集整理されたいと思う。

酪農によって代表される畜産ニュースが盛沢山に世の人々の眼に映ずることは、我々がささやかながらも農業の推進力としての畜産発展を希い此の道で生涯を送る以上最上のよろこびである。

併しながら此の様な恵まれた現在において、一つの悲願をたてるべきであろうと思う。それはこうである。

畜産がジャーナリストにもてはやされ、時代の寵児として注目される時代は今日で充分である。かつて我々の先輩が有畜農業という営農方式の普及をはかりその確立に努力して30年、時に戦時体制の制約因子が大きく働いてはいるけれども、終って10年戦後という言葉は最早ないと経済白書が述べる如く、有畜農業という言葉をあえて口にする必要がない時期に到達してもよいのではなからうか。此の言葉の忘却こそ真の意味の永遠農業が新生する所以であろう。

今世紀の終らんとする時代まで、或は更に将来にわたってこの言葉を温存する限り、我々の祈願は果てしなく願いとして続くわけである。ジャーナリストが此の願いを聞けば悲願というであろう。彼等には一つの取材が失なわれ悲しい結末が招かれる故に。そうしてかのスクラップ氏はスクラップのテーマを余儀なく変更しなければなるまい。

冬の寒空にチカチカと輝く星の下、およそ近代的な新築牛舎にコントラストなブルハウスでスクラップ氏の手許をみつめつつ感じたつれづれである、笑読あれ。